作品名をクリックすると作品に移動します。

【第三十四回「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧】

一、文部科学大臣奨励賞
長崎県立長崎南高等学校二年
小野　健　戦後六十九年の夏に何を思うか
（体験書籍『ホタル帰る―特攻隊員と母トメと娘礼子』赤羽礼子、石井宏著）

二、全国高等学校長協会賞
北海道札幌南高等学校二年
津田智沙　言葉を砥ぐ
（体験書籍『ポケットに名言を』寺山修司著）

三、全国高等学校長協会賞
大分県立大分豊府高等学校二年
岡田悠花　白を感じるとき
（体験書籍『白』原研哉著）

四、一ツ橋文芸教育振興会賞
宮城県仙台二華高等学校二年
髙橋実央　「雑音」がくれるもの
（体験書籍『夜のピクニック』恩田陸著）

五、一ツ橋文芸教育振興会賞
三重県　暁高等学校二年
曽根綾太　命を賭ける
（体験書籍『山本美香という生き方』山本美香著　日本テレビ編）

六、一ツ橋文芸教育振興会賞
鳥取県立境港総合技術高等学校一年
西村香穂　笑顔のすばらしさ
（体験書籍『ほしとたんぽぽ』金子みすゞ著）

七、一ツ橋文芸教育振興会賞
島根県立松江南高等学校一年
永瀬紗織　五体満足
（体験書籍『これがぼくらの五体満足』先天性四肢障害児父母の会編著）

八、一ツ橋文芸教育振興会賞
愛媛県立松山南高等学校二年
髙橋映美　私のオレンジ
（体験書籍『さようなら、オレンジ』岩城けい著）

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【文部科学大臣奨励賞】

戦後六十九年の夏に何を思うか

長崎県立長崎南高等学校　二年
小野　健

現代社会において、様々な人が「平和」を口にし、それを誰もが追い求める。戦争をなくしたいとは思うのだが、その方法とはいったいどのようなものなのか。私がそのように考え始めたきっかけが、この本との出会いだった。

戦争を知らない世代と呼ばれる私たちが、平和な世の中を築く方法など見つけ出せるのか、という不安にも危機感にも似た感情が、読み終えた後、からだの奥深くから湧きあがってきたのだ。

この作品は、太平洋戦争末期に爆弾を積んだ飛行機で敵艦に体当たりする、いわゆる特攻作戦に臨むため鹿児島県の知覧（ちらん）へやって来た隊員たちと、軍指定の食堂を営む女将トメさん、そしてその娘たちの交流を事実に基づき描いた物語である。隊員たちそれぞれとの思い出が、実際の手紙の文章を交えてまとめてある。作品名の元になったのは、「死んだらホタルになって帰ってくるよ」と残して飛び立った日の夜、本当に食堂にホタルが舞い込んだという宮川軍曹の話である。

特攻隊員たちの勇姿や、家族との手紙のやりとりなど、泪なしでは読むことのできない物語の数々が収められている中で、私が最も注目したのは、戦後のトメの姿である。戦時中から平和を求め続けていたトメは戦後特攻隊の事実を風化させないために、観音堂の建設を訴え続ける。特攻を負の歴史として国が隠そうとした終戦直後は、飛行場の隅に棒杭を立てて、毎日お参りをしていたとも書いてある。そして彼女の思いは最終的に、昭和六十二年の特攻平和会館という資料館の完成という形で実を結んだ。

トメがここまでして観音堂の建設にこだわったのは、特攻の事実をそのままの形で残すためだったのではないかと私は考える。隊員たちの生きた証、死んでいった事実を包み隠さず残すことで、私たち、戦争を知らない世代に、しっかりと真実を知ってほしい、平和な世の中を築いてほしいというメッセージを送りたかったのだと思う。

私は読み終えた後、所属する新聞部の取材で、知覧の特攻平和会館を訪ね、隔設する食堂でトメの孫、鳥濱明久さんにお話を伺った。ここでも戦争を知ることがとても大切なのだと身にしみて感じた。

明久さんのお話で興味深かったのは、アメリカ同時多発テロに関するお話だ。事件後、笑顔で爆弾を積んだ飛行機に乗りこ

第34回全国高校生読書体験記コンクール

み、敵に突入する特攻隊員たちの姿がテロリストと同じだとして、外国のメディアから取材を受けたという。一見同じに見えてしまうこの二つの事実も、ある隊員の発言を読み解くと、違いが見えてくる。トメに「日本は敗けるよ」と言って出撃した隊員がいた。これは軍事国家である当時の日本の姿をしっかりと表している。個人の思いと関係なく殺し合いをするのが戦争だ。彼は自らの意を押し殺し、特攻隊員として散ったのだ。彼のことを知らなければ、狂信的なテロ集団と特攻隊が同じに思えても仕方ないかもしれない。しかし、彼を知ることで、戦争の本当の姿を知ることができるのだ。トメが求めたのも、この連鎖ではないかと思う。特攻を知ることが、また別の真実を導き出してゆく。それが、戦争を知らない私たちの世代ができることであり、すべきことではないかと思う。そして、平和への道のりも、真実を知っていくことから始まるのではないのかと、この本によって気づくことができた。

この本を読み終えた後、祖父に電話をした。今の私と同じ十代後半を戦火の中で生き抜いた祖父に、少しでも多くの真実を聞いておこうと思ったのだ。普段は自分の戦争体験について多くを語る人ではないのだが、私の思いに応えて話をしてくれた。一冊の本との出会いが、ここまで繋がったのだ。

祖父との話の中で、戦争体験者の高齢化という話題が出た。私たちは被爆者から体験談を直接聞くことができる最後の世代だと呼ばれている。だから、知らなければならないという責任感さえ覚える。トメが死を前にして平和会館の完成を実現させることができたのも、一人でも多くの戦争を知らない世代に、戦争とはどういうものか、特攻とはどういうものかを知ってもらわなければならないという人々の思いが高まってきたからかもしれない。

来年は戦後七十年だ。様々なメディアが戦争や特攻を取り上げている。そんな中で、ブームに終わらせず、自ら「知りたい」という探求心と、「知っていなければならない」という責任感を持つことが、トメが恐れた風化を防ぐことになり、追い求める「平和」への近道でもあると思う。このことは、戦争や特攻、平和についてのみ言えることではないと思う。私はこれから先、なかなか真実の姿を見せない物事に対して、この探求心と責任感を持って取り組む人間になりたいと思う。

体験書籍

『ホタル帰る―特攻隊員と母トメと娘礼子』

赤羽礼子、石井宏著

第34回 全国高校生読書体験記コンクール

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【全国高等学校長協会賞】

言葉を砥ぐ

北海道札幌南高等学校　二年
津田　智沙

言葉は武器である。

「言葉をジャックナイフのようにひらめかせて、人の胸の中をぐさりと一突きするくらいは朝めし前でなければならない」と、寺山修司は書いている。そのナイフの刃先は読者だけではなく、書き手にも向いているのではないかと、わたしは最近思うようになった。

高校の図書局員として、毎月発行する図書館報の記事を書いている。文章を書くのは楽しい。その魅力は、頭の中にあったもやもやした考えにかたちを与えることにある。なんとなく考えていたとりとめもないことを文字にした瞬間、それらは途端に確かな重さをもち、存在し始める。自分でも驚くような考えがそこに浮きあがってくることもある。使い古された表現だが、本当に、あらたな自分を発見したような気になるのだ。

しかしそれは、楽しみであると同時に苦痛でもある。わたしは文章を前にしてときどき苦しくなる。なにが苦しいのかというと、それは、自分の〝ほんとう〟がわからなくなることだ。考えを文字にしながらどんどん突きつめていくと、いつの間にか自分が嘘を書いていることに気づく。

人は本来、その頭の中にいくつもの考え方が混在しているものなのだろう。ある事象に対して、それが善か悪かなんてはっきりとは言いきれない。その両面が必ず見えている。だが、ひとつの主張をするためには、自分の中の矛盾を押し殺さなくてはならない。伝達手段としての文章にはある程度の整合性が必要だからである。

そういうとき、わたしは、言葉の切っ先が自分の喉元に突きつけられているように感じる。息が苦しくなり、鼓動が速くなる。それでもわたしは書くことをやめられない。それはきっと、苦しさの中で書かれた文章ほど魅力的になるということをうすうす感じているからなのだろう。

言葉は武器である。

それに気づいたことよりも、これまでそう思わなかったことのほうがふしぎだ。図書局員になる前にも、文章を書く機会はたくさんあったはずなのに。

小学校や中学校では、読書感想文をよく書かされた。わたしは読書感想文が得意だった。いつも良い評価をもらっていた記憶がある。「わたしがこの本を選んだ理由」、印象的な本文を引用する、「もしわたしが（登場人物）だったら」、そして読後の

第34回全国高校生読書体験記コンクール

心境の変化を書く。これらは〝鉄板〟だった。あとは内容をはずさないようにすればいいだけだ。家族愛、精神的成長、そこに「青春の葛藤」が加わればもう大人の大好物だ。その本から実際になにを感じたのかではなく、その本から感じるべきことを察することができたかが重要なのだと、少なくともわたしはそう思っていた。

そういった強制力は、学年が上がるにつれて薄れるものではなく、むしろ増していった。高校生になって受けた小論文模試の答案が返されたとき、赤ペンで書かれたコメントをまだ覚えている。「この文章では、こういう解答が望ましい」。文章からなにを読み取り、なにを考えるかは個人の自由であるはずだと信じていたわたしは愕然とした。求められていることは小学生と同じだと思うと、たまらなく悔しかった。

わたしたちに与えられてきた文章表現の場は、言葉を鋭く磨くためのものではなかった。むしろ、どれだけ期待に応えられるかが試される場であった。そうやって書かれた文章は読者にも書いた本人にも、なんの影響も及ぼさない。ある意味でとても安全である。ナイフは丈夫な鞘の中におさめられている。もちろんそれが一概に悪いというわけではない。文章にはそういう側面があるのも事実である。ナイフをしまって嘘の笑顔で握手しなければならないときもある。ただ問題は、懐のナイフが錆びついていないか、鋭く砥がれているか、なによりもまずナイフがそこにあることを知っているのかということなのだ。

言葉は武器である。

「だが、同時に言葉は薬でなければならない」と、寺山修司は書いている。無分別に人を傷つけてまわるだけの言葉には意味がない。また、心の表面を嘘の優しさで撫でまわし、形式化された感動や自己満足の慰めを与えるだけの言葉には意味がない。それが蔓延した世界では、言葉はなんの力も持たなくなってしまう。

人の心をえぐり、その奥底にある深い傷を癒す言葉。

そういう言葉は、書き手が自分の身を削ることなしには生まれないのだと、わたしは信じている。信じているからこそ、苦しさの中で書きつづけるのだ。

体験書籍

『ポケットに名言を』寺山修司著

第34回 全国高校生読書体験記コンクール

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【全国高等学校長協会賞】

白を感じるとき

大分県立大分豊府高等学校二年
岡田　悠花

音もなく降る雪を、幼い頃の私は飽きもせずよく眺めていた。大分育ちの私にとって、山深い滋賀県の祖父母の家でしか見ることがない雪が珍しかったのもあるが、静かに積もっていく白で体ごと包まれるような感覚が何とも言えず好きだった。

それから十年、図書館で初めて『白』を手に取ったとき、なんて綺麗な本だろうと思った。題名の通り文字と図以外の全てが真っ白だった。スピンまでも白かったことには感動すら覚えた。周囲を見渡してもありとあらゆる場所に白色は存在するのに、純粋に白いものがあると目が引き付けられるのは何故だろう。視覚効果と言ってしまえばそれまでだけれど、赤とも青とも違う、着色されていないからこその魅力がある。

文具店に行った時、ふと思いついて紙のコーナーに立ち寄った。ずらりと紙が並ぶ棚の四分の一は白い紙で占められていた。一種類ずつに名前があり光沢や厚み、触り心地が違っていて、整然と陳列された白い紙に私の心は浮き立った。色の違いを見比べながら気に入った色を見つけるのも楽しいけれど、同じ白という色のなかでわずかな差異を見つけることのなんと楽しいことか。元々優柔不断な私だけれど、白の一つ一つが魅力的で捨て難くなりどの紙を買うか決めかねて悩む時間がますます増えてしまった。けれど、その逡巡の時間が何とも愉しいのだ。

白のごくわずかな差異を愉しむ一方で、他色と合わせて色の重なりを見るのも好きだ。古語辞典に「雪の下」という襲（かさね）の色目が載っていた。紅色の上に白色を重ね、紅梅に雪が降り積もった様子を表しているらしい。語感も意味も素敵で、白によって紅が一際映える情景を古人は趣深く感じたのだろうと興味深かった。単一で美しいだけでなくどんな色と合わせても調和する。考えてみると希少な存在である。

私が白に魅せられる理由、それは白という色が手出し不可能な存在であるからではないか。赤ならば少し紫みを帯びている場合「紫がかった赤」で説明がつく。しかし、白の場合は「紫がかった白」とはならない。藤色や菫色などの名前になって、白ではなくなってしまう。すでに完成されている色であるために他の色の介入が不可能であり、純粋であるためにそのままを保つことが難しい、柔らかそうにみえて頑固な存在だから深い魅力があるのだろう。

白に隠された魅力は色調においてだけではない。緊張などで言葉が何も浮かばなくなってしまった時、よく「頭が真っ白に

第34回全国高校生読書体験記コンクール

なる」と言うが、ここにも「白」の感性が息づいている。この場合「白」は思考が停止した「無」の状態を表すと同時に身動きが取れない緊張感も含んでいる。この緊張感はマイナスイメージが強いが、これを「切実な集中」という意味でプラスにとったものが、作者の言う「矢を一本だけ持って的に向かう集中の中に白がある」というエピソードだろう。

私は弓道部に所属しており、始めてからもう少しで二年になるが、つい先日この「切実な集中」を実感した。少し前に代替わりし、部の方針が多少変わって、今まで練習で一本ずつ矢を引いていたのが一度に二本持って引いても良いことになった。たくさん練習ができるようにとの配慮であるが、実際に二本持つ人は少なかった。私も試してみて分かったのだが、一本と二本では矢の重要感がかなり違う。二本持つとどうしてももう一本に対する甘えがでてしまい、一本だけ引くときより確実に集中が鈍る。吉田兼好も言う「二の矢への無意識の依存」は実際に生じるのだ。

さらに、弦を限界まで引いた状態の〈会〉に到達し〈離れ〉で矢を放つ瞬間にも「白」の緊張感を感じる。〈会〉に到達するまでは狙いや力の抜き加減などを思考しているのだが、矢が放たれる刹那だけは何の意志も介入せず、後戻りができない純粋無垢な緊張感が存在しているだけである。不可侵と不可逆という二つの点でこの一瞬に「白」を感じる。

私が敬愛する俳人、種田山頭火もこの感覚を感じていたのだろうか。彼の作品に、「山のしづけさは白い花」という一句がある。普通群れて咲くハクサンイチゲが、山奥でぽつねんと一輪だけその白く可憐な姿を見せている、そんな光景が目に浮かぶような句である。しかし、私自身は花の色というより山の「静けさ」そのものが白いのではないかと思った。色彩ではなく、静寂の巨大な存在感を心が察知すること、これこそが原研哉のいう「白」なのだろう。

白。ある一流のグラフィックデザイナーが論じ、ある一流の俳人が詠った一つの感性。一端にせよ、それを私も共有できるということが嬉しくて仕方ない。今まで気づかなかった感性を見つけた。するとまだ気づかない他の感性を探したくなった。「白」は始点だ。白を感じたとき、私の感性は拡がり始めた。

体験書籍

『白』原研哉著

第34回 全国高校生読書体験記 オンライン

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

「雑音」がくれるもの

宮城県仙台二華高等学校二年
高橋　実央

私は学校行事が好きであり、嫌いだ。好きであるということに対して、何故かと聞いてくる人は少ない。しかし、嫌いだと言うとほとんどの人に何故かと聞かれる。運動が苦手だから体育祭が嫌いだとか、音痴だから合唱コンクールが嫌いだとか、そういう話ではないのだ。一つの行事が終わってしまうときの「ああ、もう終わってしまう。」という、寂しさと焦りが入り混じったような、泣き出してしまいたくなるような、そんな気持ちを抱くことが、たまらなく辛いのだ。

この本を読む前の私は、そういった気持ちから目を背けていた。何をするにしても、心からのめり込む前にやめてしまっていた。自分を守りたいが故に、自分が傷つきそうなことを知らず知らずのうちに避けて来たのだ。

そして、この本に出会った。この物語を読んでみようと思ったのは、物語の主人公たちが私と同じ高校生であり、舞台が学校行事だったからだ。その行事の名は「歩行祭」。全校生徒がただ黙々と夜中歩くというものである。そんな行事に、何の意味があるのか。読み始めた時の私には、全くわからなかった。同時に、この行事が終わった時、彼らはどんな気持ちを抱くのか興味を持った。

「みんなで、夜歩く。たったそれだけのことなのにね。どうして、それだけのことが、こんなに特別なんだろうね。」そう言ったのは、転校し、最後の歩行祭には参加できなかった杏奈だ。確かにそうだ。練習過程があるとはいえ、体育祭はみんなでスポーツをするだけだし、合唱祭はみんなで歌を歌うだけ。たったそれだけのことだ。勝ち負けはあるが、突き詰めれば、たったそれだけのこと。

それでも、なぜ、あんなにも私たちの中で「特別なこと」になるのか。それは、自分だけでなく、みんながいるからだと思う。みんなで一緒に喜ぶこと。疲れること。悔しさを共有すること。その一つ一つが、「たったそれだけのこと」を「特別なこと」に変えていく。それは、仲間がいる私たちにだけ許された「特別」だ。

私たちだけに許された「特別」は、もう一つある。俗に言う「青春」だ。歩行祭の最中、忍はそれを貴子に、「臭くて、惨めで、恥かしくてみっともないもの。」と言った。そして、それを「雑音」と例えるのだ。確かにその通りだ。もし、大人になった私が、今の私を見たら、どう思うだろう。きっと、なかっ

第34回 全国高校生読書体験記コンクール

たことにしてしまいたいことや、やり直したいことの数々なのだろう。

しかし、「だけどさ、」と忍は隣を歩く融に言う。「雑音だっておまえを作ってるんだよ。雑音はうるさいけど、やっぱ聞いておかなきゃなんない時だってあるんだよ。」と。それは一体どういう意味か。周りと衝突することや、恋に悩むこと、学校行事に全力で取り組むことや、部活に明け暮れること。そういった諸々を「雑音」と呼ぶならば、「雑音」とは、聞かなくてもいいものであり、むしろ、聞かない方が傷つくことは少ないであろうものだ。ここで改めて、「雑音」の数々を眺めてみる。すると、ほとんどが、大人になってからでは、もう聞くことができないものばかりだと気づくのだ。私は、この時になってようやく、忍の言葉の真意がわかったような気がした。「大人」と「子ども」という境界線の上にいる私たちだけが、聞くことのできる「雑音」は、多かれ少なかれ、私たちに影響を与える。それらを聞いて受けた傷ですら、私たちの中に何かを残すに違いない。そう考えると、面倒なことも、嫌なことも全てが私を形作る私の欠片なのだと気づく。

この物語を読み始めたとき、私は無意識のうちに、この物語の舞台である「歩行祭」という行事に、意味を見出そうとした。けれど、それこそが間違いだったのだ。何かの意味があるからソレをやる。もしくは、何かの意味があるから、ソレは自分を形作っている。いつしか、私はそんな風に考えていたのだ。

だが、その考えは間違っていた。ソレに意味を見出せることと、ソレが自分を形作ることとは、必ずしも、同じこととは限らないのだ。意味の有無にかかわらず、全ての物事が自分を形作り、豊かにしてくれているのだ。

この本は、私に大切なことを教えてくれた。それは、私の周りの「雑音」全てに意味があり、今の私にとって、不要なものは何もないということだ。つまり、全てのことを自分の中に吸収できるということであり、自分の中の可能性を無限に広げるチャンスを秘めているということでもある。私の思いもしなかったところで、私の中の可能性が開花するかも知れない。私は、その自身の可能性の芽を、自らの手で手折ることがないようにしたい。この本を読む前の、傷つくことから逃げていた自分と決別し、痛みと正面から対峙する勇気を持ちたいと思う。その傷さえもが、私を形作り、私の一部となっていくのだから。

この本は、確かに私の耳を震わせた、小さな「雑音」であった。

体験書籍

『夜のピクニック』恩田陸著

第3回 全国高校生読書体験記 コンクール

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

命を賭ける

三重県　暁高等学校二年　曽根　綾太

僕がこの本を読もうと思った理由は、ジャーナリストの山本美香さんが銃撃された事件が、次第に世の中でも僕の中でも風化してしまっていると感じたからだ。事件当時は多く報道されるが、少し経つと報道されなくなる。それが現実だ。だからもう一度、忘れてはいけないこの事実を、僕の心に刻み込もうと思いこの本を読んだ。

この本は、二〇一二年八月シリアのアレッポで亡くなった山本美香さんのジャーナリスト人生について書かれたものだ。

山本美香さんが亡くなったとき、日本中に衝撃が走った。同時に、それまであまり人目に触れてこなかった戦場のジャーナリストという仕事に、スポットが当たった瞬間でもあった。

この本には、スポットがあまり当たらなくとも懸命に取材をしている姿が描写されている。どの取材も僕の想像を絶するものばかりだ。現代の日本では、ほぼ僕たちと無関係の戦争。その反面、今このときも世界のどこかで戦争・紛争が起きている。そのギャップがあまりにも大きすぎる。だから、「知らなかったこと」がこの本の中に数多くあった。「死と隣り合わせの中、毎日生活している現状」それを伝え、現実を知らせてくれるのがこの本だ。

僕がこの本の中で一番心に残っている言葉がある。それは、「命を賭けてまで、この仕事をする意味があるのか。」という言葉だ。この言葉は山本美香さんのパートナー佐藤和孝さんが、銃撃事件後に周りの方々から言われたものだ。僕は、この言葉はとても深いなと思った。僕がこの質問をされたとしたら、どのように考えるだろう。そんな疑問が浮かび自問自答をしてみた。

僕が戦場などの危険な場所で仕事をするとしたら、「国境なき医師団」だ。僕の夢である医師になることができたら、参加する機会があるかもしれない。それに参加していることを想像して、その質問に答えるとしたら、「はい、あります。」だろう。それはなぜか。

僕は、シュプリンツェン・ゴールドバーグ症候群という遺伝子の病気を持っている。この病気は今現在、症例が全国で二十例のみだそうだ。そのため難病指定はされず、研究が進まない。ただ時間が過ぎていくばかりである。この読書体験記を通じて少しでも多くの方々に知ってもらうことができるのなら、この上なく幸せだ。

第34回全国高校生読書体験記コンクール

その病気の影響で産まれたときから数々の病気を患い、入院をし、実に十六歳にして十三回の手術を経験してきた。そのため、日々「死」というものを他の人よりも意識することが多いのが現状だ。もし今まで何も手術をしてこなかったら、僕は十七歳までほぼ確実に生きてこられなかったと思う。

このような現実の中で僕は最近、臨死体験をした。それは今年三月、心臓の大動脈を人工血管にする十三時間に及ぶ大手術から一週間後のことだ。積極的に歩いてと医師から言われたので夕食後歩き、ベッドに座った瞬間に心拍数が一気に上がった。その症状はそれまでにもあったが、五分程で治まっていた。しかし、その時はいつもと違うことを感じた母が、ナースコールで医師を呼んだ。医師が来るまでの時間が長かったのか、短かかったのか覚えておらず、とにかく自分がどうなるのか怖くてたまらなかった。そんな中でも自分の命を諦めることはできない。「死、まだ死ねない」と頭の中で何度も何度もつぶやいていた。ほどなくして処置により治まった。後日、医師から「心拍数は百八十で平常時の約二倍の速さで、死んでもおかしくない心拍数だった。」と聞かされた。「死にたい」と思って生を享ける人はいない。また、戦争などで命を奪われた人は「死にたくない」ときっと一度は思っていたであろう。だからこそ僕は、命を賭けてでもする意味のある仕事がしたい。僕に与えられた命を使って、一人でも多くの人に、人として生命を授かった大切さを伝えるために。

この本を読んで、改めて将来の夢への思いが強くなった。命を賭けて・誰かのために・何かをすることのすばらしさや、奥深さが伝わってきた。これから僕の限りある命の中でどれ程のものができるかわからないけれど、僕ができることは積極的にしていきたい。

また、元兵庫県立舞子高校の諏訪清二先生のお話の中で、「大きな災害が起こったときは、よく言われる『自分のことは自分で守る』から『自分たちのことは自分たちで守る』になる。自分で考え、行動する力を身につけることがみんなの命を守ることにつながる」とある。たとえ災害がなくとも、この思いが世界の共通認識になればもっと平和な世界になれるはずだと思う。なので、これから伝え、行動していきたい。

最後に、山本美香さんの御冥福を祈るとともに、感謝をしたいと思う。

体験書籍

『山本美香という生き方』山本美香著　日本テレビ編

全国高校生読書体験記 第3回 ノンフィクション

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

笑顔のすばらしさ

鳥取県立境港総合技術高等学校　一年
西村　香穂

『たいりょう』この詩は私が小学生の頃に学校の授業で読んだ詩だ。金子みすゞさんの詩の一つである。

私は学校がとても嫌いだった。何をするにもやる気がでず、学校も休みがちだった。だがある宿題が私を変えることになった。それは国語の宿題で詩を暗記してこようという内容だった。家に帰りさっそく声に出して詩を読んでいた。その時、祖父と祖母が私に「香穂は読むのが上手だね」と言ってくれて、私はそれがとてもうれしかった。

それから私は金子さんの詩にどんどんとひかれていったのである。次に出会った詩は『わたしとことりとすずと』である。この詩は私に勇気を与え続けてくれる詩である。私は人一倍覚えることが苦手で、いつもなんで他の人はできるのに自分はできないんだろうと考えていた。その時私の心を変えてくれたのがこの詩である。他の人ができていることがたとえ自分にできなくても、他の人ができないことが自分はできているのかもしれない。この詩はそう私に教えてくれた。

金子さんの人生は短いものだった。明治三十六年に生まれ、その二十六年後には帰らぬ人となる。この人生は辛く悲しいものだった。

十六歳の時、童謡や詩を書くようになる。二十三歳で結婚をするが夫は文学に対し理解がなく、童謡や詩を書くことを禁止する。禁止されたことに対し心の支えとなったのはたった一人の娘である。だがみすゞは病にかかっており、それは夫からうつされたものだった。娘が三歳の時みすゞは自らの命を自分で断った。娘の名前はふさえという。ふさえは母を憎んでいた。自分は置いていかれた子だと思っていた。だが詩の中に登場するのは子どものものが多い。私はみすゞさんは本当に娘が大好きで可愛くて、しかたがないと思っていたと考える。辛い人生の中に娘という小さな光がともっていたんだなと思った。

『わらい』という詩がある。この詩は私が一番好きな詩である。なみだがこぼれる、わらいがこぼれる。この表現に私はひかれた。私は生きていく中で一番大切なのは笑顔だと思っている。詩の中で「もしも　なみだが　こぼれるように、こんな　わらいが　こぼれたら、どんなに、どんなに、きれいでしょう。」とある。なみだを流すことは悪いことではないと思う。だけどなみだがわらいに変わればきれいなんだ、美しいんだと考えるようになった。この詩は、もし自分が辛くなってなみだを流す

第34回全国高校生読書体験記コンクール

ときがあるなら、なみだの分だけ笑えば良いと教えてくれているように思う。

私は学校の宿題で自分は変わったと言った。祖父と祖母に言われた言葉で私の中で一つの目標ができた。私は詩を声に出して読むのが好きだ。詩にこめられている言葉一つ一つにどんな気持ちがかくれているのだろうかと考え読むのが好きだ。詩を読みおわった後必ず祖母の顔を見るとにこにこと笑顔で聞いてくれていた。それを見た時私はあることを決めた。私が本や詩を読むことによって笑顔になってくれる人がいる。その笑顔を守っていかないといけないと。周りの人から見たらちっぽけな目標かもしれないが私にとっては大きな目標である。

私には一歳と四歳のいとこがいる。そのいとこに本を読んであげることがある。読み終わり「おしまい」というといつも笑顔で「ありがとう」と言われる。その笑顔を見ると読んでよかったと思う。これからもたくさん本を読んであげたいと思う。

私はまだ将来の夢は決まっていない。だけど一つ言えることがある。それは小さな笑顔から大きな笑顔までたくさんの笑顔を守り増やしていけるような人になりたいということだ。「笑顔」で私は自分を変えることができた。これも金子さんの詩に出会わなければ今の自分はいない。もし辛く、道に迷ってしまうことがあるならば、ぜひ金子さんの詩を読んでほしい。そこから何か見つけることができるかもしれない。金子さんのすてきな詩の数々に出会えてよかった。そして「笑顔」という宝物を見つけることができた。

私は必ず人を笑顔にできるような人になる。

体験書籍

『ほしとたんぽぽ』金子みすゞ著

全国高校生読書体験記コンクール 第31回

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

五体満足

島根県立松江南高等学校　一年
永瀬　紗織

あなたは〝五体満足〟という言葉の意味を知っているだろうか。辞書を開くと、そこには「五体に欠けたところや不完全なところがないこと。また、そのさま。」と書いてある。〝五体〟とは人間の頭、頸、胸、手、足を主に意味している。これらのうち、特に手や足に生まれつき障がいを持つ子供や大人の様々な体験が、ありのまま綴られているのがこの本だ。

私がこの本に出会ったのは約八年前、小学校低学年の頃だった。実は私自身、生まれつき手足に障がいがある。両手の指が不揃いに短く、左足の指が五本とも無い。足のほうは義足をつけて日常生活を送っているが、手はまるっきりむき出しだ。人の多い場所へ行くと必然的に視線を向けられることが他の人より多くなる。しかし私は、隠すようなことは絶対にしなかった。隠した時点で自分を否定しているような、そんな気がするからだ。隠さず、堂々としていたほうが周りは私の手のことなどには注目しないし、何より私自身の気持ちが晴れやかになる。

そんな風に自分らしく振舞っていても、周囲の視線を感じることはやはりとても辛かった。いじめられたり、からかわれたりしたことは一度もないが、自分と周りの「できることの差」を思い知らされるのが何よりも苦痛だった。そんなとき、母が私に手渡してくれたのがこの本だった。

最初読んだときは「自分以外にこんなに多くの人が同じ境遇にいるのか」と驚いた。私はこれまでの日常生活で、自分と同じような障がいを持つ人に出会ったことがなかったからだ。でもそれは出会ったことがないのではなく、気づいていないだけだったのだと、この本を読んで知った。生まれつき手足に不自由があったとしても、それを本人たちは受け入れなければならない。次第にそれは当たり前になっていく。私自身、今さら普通の人のように五本きれいに揃った指のある手と付け替えられたら、今書いている文字も上手く書けないだろう。ごく当たり前に生活しているから気づかないのだ。

でも小さいときは自分の障がいをすぐには理解できず、なかなか自分の手足を受け入れることができなかった。この本の中で、そんな自分とよく似ていて、印象に残っているのが〝あんちゃん、いーっぱいごはんたべたら〟だ。「きょう、あんちゃんいーっぱいごはんたべたら、こっちのみじかいほうのあんよもおおきくなるかな。」私は幼い頃、これと全く同じやりとりを母親としたことがある。「あんちゃんのおてて、なんでな

第34回 全国高校生読書体験記コンクール

いの？」「どうしてあんちゃんはみんなとちがうの？」あんちゃんは成長するにつれて自分の障がいに気づき、悩む。そんなあんちゃんに、お母さんは、「あんちゃんのおててとあんよは神様がくれた大事な大事なものだよ。好きになってあげてね。」と言った。この言葉を受けたあんちゃんは欲しいと懇願していた義手の型どりのとき、なんと「あんちゃんね、やっぱりほんもののおててのほうがすきになっちゃったの。だから、にせもののおててつくらなくていいよ。」と言ったのだ。

私はこの一文に強く共感した。そう、この手と足を含めて自分なのだと。よく障がいを〝ハンディ〟や〝試練〟などと表す人がいる。まぁ、色々な考え方があると思うし、私自身「これは神様からの試練なのかもしれない」と実感することもある。でも〝ハンディ〟や〝試練〟というのは、その人自身が感じるものであり、他人が言うのは間違っているのではないだろうか。私は自分の手足は、一種の〝チャームポイント〟だと思ってもらいたい。〝人と違って特別〟なのではなくて、〝人それぞれ違う特徴〟つまり〝個性〟だ。この手足があるからこそ「私」であり、この手足がなければ「私」は「私」ではなくなってしまうだろう。

ここでもう一度〝五体満足〟の言葉の意味を考えてみる。〝ぼくにとっては生まれたときの形が、五体満足〟を書いた紺屋正太郎君の言葉に答えはあると思う。

「まわりの人々は、障がい者に対して「かわいそう」とか、「障がいがあるのにがんばるねぇ」とか言って同情します。（中略）それらは一生懸命生きている障がい者に対してある意味では失礼なことだと思います。（中略）ぼくにとっては生まれたときの形が、五体満足と思っています。」

五体満足とは、五体が不完全でない状態のことを表すのではなく、その人が自分の体に満足しているかどうかではないだろうか。たとえ障がいがあったとしても、健常者の人にはできない体験をすることができる。障がいを通じて、たくさんの人と出会い、色々なものを得ることができた。

私が生まれ持ったこのちょっと変わった個性は、私の大切な授かり物であり、財産だ。私は五体満足である。

体験書籍

『これがぼくらの五体満足』先天性四肢障害児父母の会編著

全国高校生読書体験記 第34回 コンクール

第三十四回全国高校生読書体験記コンクール
【一ツ橋文芸教育振興会賞】

私のオレンジ

愛媛県立松山南高等学校二年
高橋　映美

地平線からのぞく太陽を、じっと見つめる女性の後ろ姿。この本を何気なく手に取ったとき、思わず表紙に目が留まった。女性の名はサリマだった。私はこの物語を通してサリマと一緒に悩み、考え、喜び、そして「生きる」ことについて考えることになった。

サリマは夫と二人の息子とともに、難民としてオーストラリアに移住した。スーパーで肉をさばく仕事を始めた彼女だったが、人種差別の壁に加え、夫に出て行かれる。そんなサリマの楽しみは、英語学校だった。彼女の仲間たちは、何かを手に入れるために英語を習得しようとしていた。しかし、サリマは欲を満たすためではなく、とにかく生きるために言葉を獲得していく。そこで得た達成感や誇りは彼女に自信を与え、その姿はうらやましくさえある。

日本語を話す父と英語を話す母を持つ私にとって、二つの言葉は生まれたときから呼吸するように身についた。言語の獲得における達成感や自信というものとは無縁だった。周りから高く評価される英語力は、私にとっては努力の賜ではない。本当の自分を認め、見つけてもらうことは難しい。二カ国語を話せることをもてはやされることが、私の日常の平穏をおびやかすことさえある。イギリス人の母を持ちながらも、日本で生まれ育った私にとっては、自分のふるさとがどこなのかという問いに、一つの答えは見つからない。これから向かう場所も一つには定まらない。そんな思いが私の中で渦巻く。ある意味では、難民であったサリマと共通する不安の渦中にいる。

生きるために発せられるサリマの言葉は、たとえカタコトではあっても、偽りがなく、一つ一つが生きていた。ちょうど彼女のように、太陽のオレンジのように、温かく燃えていた。言葉というものはその人自身であると改めて思った。彼女は自らの境遇を決して言い訳にはしなかった。故郷の大きな太陽を思った。オレンジに燃える太陽はサリマの生きる希望であり、生きる意味であったように思う。

「あたしの生まれ持ってきたものは誰も奪えない、そして摑んだものを奪うことは二度と許さない。」

というサリマの言葉を、具体的に理解することはすぐにはできなかった。けれど、何か心に訴えかけ、迫ってくるものがあった。サリマがたどり着いた平凡な生活の中で、摑んだものとは何だったのだろう。追い立てられるようにして異境の地にや

第34回 全国高校生読書体験記コンクール

ってきたとき、自身とふるさとをつないでくれたのは目に見える物体としての太陽だけではない。彼女の心の奥にある小さなオレンジ色の生きる炎。その炎こそが彼女の生まれ持ってきたものではないだろうか。そして秘めた炎をたよりに、彼女は徐徐に自立心や誇りを持つようになる。今まで夫に従ってきた自分を捨て、第二の人生を始めるのだ。いやむしろ、初めて自分の足で歩む人生と言ってもいいだろう。これこそが彼女がやっと掴んだもののように感じる。サリマがすがるようにして探し求めてきたオレンジは、もうただの夢ではないのだ。

サリマの勉強に取り組む熱心な姿勢も印象的だ。今まで日本で暮らしてきた中で、時には日本の学校の不自由さや多くの面での詰め込みに戸惑いを感じながらも、周りに溶け込もうとしてきた。自分の不安や自信のなさにも蓋をして、目をつぶってきた。不平を表に出さず、控えめであるという私の性格は日本では美徳だが、イギリスでの私は、「日本語を話せるらしい消極的な女の子」に過ぎない。彼女のように純粋におびえることなく、学ぶことを楽しめるようになりたい、そう思うようになっていた。安全な場所から飛び出して冒険したい自分がいた。私はどこに向かって何をしようとしているのか。口々に夢を語る友人の傍らで、私には自分の将来いるべき場所がどこなのかすら定まらない。冒険の行き先も目的もないままに、将来の国籍選択を迫られている今、自らのアイデンティティを探ろうと焦っている。自分は自分でしかないのに、国籍や故郷をどうして一つに決めなければならないのか、境遇にこだわる世の中に疑問を持ち続けている。

サリマの言葉に寄り添うようにして読んだこの物語は、心の中に何とも言えない温かさを染み込ませてくれた。そこで、改めて「生きる」ということについて考えることができた。今までは、目的があってこそ生きる意味がある、と信じてきた。焦っていた。しかし、サリマは違う。生きていく、そのことが彼女の目的だった。全く知らない世界でも、気にせず飛び込んで、失敗したらそれはそれだ。「生きる」ことを目的に、まっすぐな人生を送れば、私もいつか彼女のように澄み切ったオレンジの風景を見られるのかもしれない。

体験書籍

『さようなら、オレンジ』岩城けい著

全国高校生読書体験記コンクール 第34回

選考委員による選評

胸を打つ、力強い文章の数々

辻原　登

ある事実を知り、そのことについて考察を深めて行く過程が経験と呼ばれ、ついに真実にたどり着く。事実に血が通った瞬間だ。血を通わせる者は、つねにあなた自身なのだ。

小野健君の「戦後六十九年の夏に何を思うか」は、事実から真実への道筋を鮮やかにたどってみせた。知覧で、特攻隊の事実を風化させないために観音堂の建設に奔走した一人の女性を描いた本によって、「隊員たちの生きた証、死んでいった事実」を知り、戦争という事実を知らない「私」は実際に知覧に赴き、特攻平和会館を訪ね、関係者に直接取材する。

「私」の中で、「特攻」という事実が経験を通って真実へ、ひとつの透徹した認識へと成長する。そして、これからも、なかなか真実の姿を見せない物事に対して、同じような探求心と責任感で取り組んで行こうという決意表明で文を結ぶ。一冊の本との出会いをこれほど真摯に受け止めた文章は稀だ。

だが、文章はまた常に我々を正しい経験へと導き、真実へとたどり着かせてくれるとは限らない。津田智沙さんの「言葉を砥ぐ」は、書くという行為の恐さ、危うさを、修辞の達人寺山修司の箴言から説きおこして考察と、経験を深め、彼女独自の真実へとたどり着く。「人の心をえぐり、その奥底にある深い傷を癒す言葉」へと。

音もなく降る雪の情景から、抽象度を思いっきり高めて、「私が白に魅せられる理由、それは白という色が手出し不可能な存在であるからではないか」という問いを引出し、弓道の「切実な集中」体験を通って、種田山頭火の「山のしづけさは白い花」の句へと進む。俳句こそ芸術表現の中でも最も抽象度の高いものだが、岡田悠花さんは、花が白いのではなく、「静けさ」が白いのだと言ってのける。幼い頃の雪の体験という事実から何と遠くまで来たことだろう。言葉の力というよりほかない。

言葉には意味がある。だが、言葉と意味が切り離され、バラバラになって漂うということもある。それを高橋実央さんは「雑音」と名付ける。雑音は、実は我々の全人生にわたって常にあって、苦悩と迷いをもたらすものだが、まさに高橋さんが言う如く、「大人」と「子供」の境界線上にいる「私たち」の耳をこそ最も強く震わせる。人生に意味はあるのか？「『雑音』がくれるもの」は、雑音に耳を傾け、そこから言葉と意味のつながりを発見し直し、生を紡ぎだすことの喜びを低い声で語る。

症例が全国で二十例しかないシュプリンツェン・ゴールドバーグ症候群という遺伝子の病気を持ち、十六歳にして死と隣り合わせの十三回もの大きな手術に耐えてきた曽根綾太君の「命を賭ける」は、二〇一二年八月、シリアのアレッポで殺害された戦場ジャーナリスト山本美香の生き方を通して、「これから僕の限りある命の中で」、その命を賭けて意味のある仕事がしたい、医師となって「国境なき医師団」に参加する将来を強く夢見るようになる。候補作中、最も胸を打つ文章だった。

「私は必ず人を笑顔にできるような人になる」と結んだ西村香穂さん（「笑顔のすばらしさ」）に喝采。

「私が生まれ持ったこのちょっと変わった個性は、私の大切な授かり物であり、財産だ。私は五体満足である（「五体満足」）と言い切る永瀬紗織さんの心意気にも同じく喝采！

目的があってこそ生きる意味があると信じてきた髙橋映美さんは、『さようなら、オレンジ』に描かれたサリマの生き方を通して、「生きる」ことそのものに意味を見出し、新しい世界に歩み入る。力強い文章だ。

読書体験の広がり

穂村　弘

「戦後六十九年の夏に何を思うか」には、本で読んだことをその後の行動によって血肉化しようとする迫力があった。「私は読み終えた後、所属する新聞部の取材で、知覧（ちらん）の特攻平和会館を訪ね、隔設する食堂でトメの孫、鳥濱明久さんにお話を伺った」「この本を読み終えた後、祖父に電話をした」。このような直接的な行動だけが読書体験の在り方とは思わないが、作者はそれらの取材を通して、特攻隊員とテロリストの違いや戦争体験者の高齢化について自分なりに考えを進めている。この作品の中では思考と行動が両輪として機能している。

「白を感じるとき」では、本から受け取ったことを自己の記憶や感覚と結びつけて新たな認識が生み出されている。その自在さと深さに注目した。「赤ならば少し紫みを帯びている場合『紫がかった赤』で説明がつく。しかし、白の場合は『紫がかった白』とはならない。藤色や菫色などの名前になって、白ではなくなってしまう」という把握、弓道における緊張感への連想、そして「山のしづけさは白い花」の句についての「私自身は花の色というより山の『静けさ』そのものが白いのではないかと

思った」という読解など。「白」という一点のキーワードから実に魅力的な世界が展開されていて、「白を感じたとき、私の感性は拡がり始めた」という結びの一文に説得力を感じた。

「言葉を砥ぐ」には特別な魅力があった。この文章は、言葉を用いて書くということについて言葉を用いて書く、といういわばメタ的な構造をもっている。「人は本来、その頭の中にいくつもの考え方が混在しているものなのだろう。ある事象に対して、それが善か悪かなんてはっきりとは言いきれない。その両面が必ず見えている。だが、ひとつの主張をするためには、自分の中の矛盾を押し殺さなくてはならない」。書くことの起点であり、だからこそ盲点でもあるような核心部分にまで、作者の言葉は届いている。

「五体満足」は、その冒頭で辞書の定義を引用するところから始まる。そして、その定義を否定するところで終わるのだ。自らの存在を懸けて辞書の正しさを覆す。そうせざるを得ない思いの強さと言葉の運びに感動した。

「私のオレンジ」には、バイリンガルであることの不安が語られている。とても新鮮なテーマだった。言葉が単なるツールなら、多くの言語を使えることは文句なく長所だろう。しかし、この作品を読んで、それが何よりもまずアイデンティティの核であることを改めて認識させられた。

「『雑音』がくれるもの」では、読書を通して自らの価値観を獲得するところに魅力を感じた。「好きであるということに対して、何故かと聞いてくる人は少ない。しかし、嫌いだと言うとほとんどの人に何故かと聞かれる」という、学校行事についてのくだりになるほどと思う。既に存在する暗黙の価値観が行く手を阻むことがあるのだ。

「命を賭ける」は、そのタイトルに惹かれた。全ての人間はこの世に生まれてきた時から、或る意味では強制的に命を賭けさせられている。だが、自らの意志で何かに「命を賭ける」のは全く次元の異なる決意なのだ。この作品には、その決意のラインを超える動機と過程が表現されている。

「笑顔のすばらしさ」の独自性は、暗記するために声を出して本を読んでいるところだ。散文を読む時、言葉よりもその背後の内容に意識が向かう。だが、作者が音読しているような詩には言葉そのものを味わう面白さがある。それは再読や暗唱を前提とした読書でもある。作者はそこからさらに進んで、他人に本を読んで聞かせるという行為に至る。そこで未知の「笑顔」に出会った。新鮮な読書体験だと思う。

何を読み、何に触れたか

角田　光代

戦争にかんする本の感想文は非常にむずかしいと思う。戦争はいけない、平和がすばらしいという結論に至るしかないし、自分の言葉を使おうとしても、どこか借りてきたような言葉の羅列になってしまうことが多い。それでもあえて太平洋戦争にかんする本を読み、自分の世代ができることについて書いた小野健さんの『戦後六十九年の夏に何を思うか』に敬意を表したい。作者は、特攻にかんする本を読み、すぐさま知覧（ちらん）の平和会館を訪れ、関係者に取材をしている。この行動力はすばらしいと思う。まさに読書が作者を動かし、体験させている。「なかなか真実の姿を見せない物事に対して、この探究心と責任感を持って取り組む人間になりたいと思う。」と作者は締めくくるが、まさに、探究心と責任感に満ちあふれた体験記である。

津田智沙さん『言葉を砥ぐ』もみごとな文章だ。教育の場での文章表現について疑問を持ち、怒り、そして寺山修司の言葉を思う。言葉と向き合う真摯な姿が、文章から立ち上がる。そのままの姿勢で、ぜひ自分の言葉を書き続けてほしいと心から思う。

白、という概念だけで文章を成立させた『白を感じるとき』、岡田悠花さんのセンスがすぐれていると思った。視点がユニークで、感性がゆたかなところが魅力的である。山頭火の句を引き、花ではなく静けさが白いと指摘した部分には、はっとさせられた。

髙橋実央さん『「雑音」がくれるもの』は、高校二年生の今でしかできない読書だし、今でしか書けない体験記だと思う。その「今」という瞬間をきちんととらえて言葉にしている。学校行事をめんどうだとしか思わなかった私は、読んでいて、雑音に囲まれている高校生をうらやましく思ったほどだ。

『命を賭ける』を書いた曽根綾太さんは、ジャーナリストである山本美香さんの本を読み、「命」という言葉に反応する。ご自身の病気を通して、「命」というものと真剣に向き合い、命を賭けられる仕事について考える。自分の将来と、仕事についての真剣な考察が、文章に緊迫感をみなぎらせていて、「だれかのために」何かをしたいという思いが、きれいごとになっておらず、そこがすばらしいと思う。

『笑顔のすばらしさ』を書いた西村香穂さんは、金子みすゞの作品だけでなく、その生涯にも思いを馳せ、その短い生涯から「うつくしいもの」をさがそうとする。そして、まだはっきりとは決まっていない自分の未来に、そのうつくしいものを取り入れようとするさまが、じつに素直な筆致で描かれている。

ご自身も障がいを持つ永瀬紗織さんの『五体満足』は、同じ思いをしている人たちの声を読み、障がいとは何かを真っ向から考え、言葉にしようとしている。迫力がありながらも、チャーミングなしなやかさがある。この文章もまた、この作者の書くところの「チャームポイント」、「個性」だと思う。

『私のオレンジ』を書いた髙橋映美さんは、イギリス人の母親と日本人の父親を持つご自身の境遇と重ね合わせて読み、「生きる」ことについて考えている。「生きる」と言っても、大仰な意味ではなく、アイデンティティも含め、どのように自分は歩んでいくのかという、今このときでなければ真剣に抱けない問いだ。一冊の本に登場する、ひとりの登場人物が、いかに彼女に寄り添ったのかがわかる、気持ちのいい文章だった。

今回のみなさんの文章を読んでいて、高校生である三年間という短い時間が、いかに将来に影響を及ぼすかについて考えさせられた。その三年間に、何を読み、何に触れ、何を考え、いかに自分の言葉を獲得したか。そういうことがいかに重要であるか、教えられた気分だった。

心を磨き、未来を切り拓く

文部科学省初等中等教育局主任視学官
清原　洋一

最終審査に残った一五作品は、いずれも読書をもとに他の本や情報、自分自身の体験や活動と関連付けながら、考え感じたことが上手に表現され心のこもったものだった。そればかりでなく、今後の人生の生き方や心構えが明確に伝わって来て、すばらしい作品ばかりであった。

文部科学大臣奨励賞に輝いた小野健さんの作品は、本を読み筆者のメッセージを感じ取るだけでなく、実際に知覧（ちらん）の特攻平和館を訪ねるなどしながら、読書とそれをもとに行動し考えを深めている点がすばらしい。その取材からも、「日本は敗けるよ」と言って自らの意を押し殺して、特攻隊員として散っていった事実を聞き、本当の姿を知ることの重要性を身をもって体験している。そして、戦争ということのみならず、真実の姿を見せない物事に対して、自ら「知りたい」という探求心と、「知っていかなければならない」という責任感を持って取り組む人間になりたいとその決意を綴っている。

全国高等学校長協会賞に輝いた津田智沙さんの作品は、読書

から感じ取り考えた象徴的な言葉として「言葉は武器である」を取り上げ、大きく三視点から巧みに表現している。苦しさの中で書かれた文章ほど魅力的になること、言葉を砥ぐことの大切さ、深い傷を癒やす言葉があること、いずれも実際のこれまでの体験と結びつけながら論じている。「言葉は武器である」という言葉がずしっと心に響いてきた。表現力という点で、最も評価すべきものと感じた。

全国高等学校長協会賞に輝いた岡田悠花さんの作品は、『白』を読んだことをもとに、様々な視点から考え感性を磨いていることがすばらしい。幼い頃の雪の静かに積もっていく白で体ごと包まれるような感覚、白という色の魅力など、色調という視点からの様々な考察、作者の言う「矢を一本だけ持って的に向かう集中の中に白がある」というエピソードをもとに弓道を通して精神的な意味での「白」を感じるときのこと、更に、種田山頭火の「山のしづけさは白い花」という一句とも結びつけて、原研哉のいう「白」とは、静寂の巨大な存在感を心が察知することではと心を巡らしている。そして、「白」を始点にした感性の拡がりを綴っている。

一ツ橋文芸教育振興会賞に輝いた五作品についても、短い言葉ですが、心に響いたことについて示したいと思います。

髙橋実央さん、心の葛藤、そして痛みと正面から対峙する勇気を持ちたいという気持ちを強く感じました。

曽根綾太さん、命を賭けて人生に向かっていこうとすること、その決意が伝わってきました。

西村香穂さん、笑顔という宝物、今後も大切にしていってください。

永瀬紗織さん、五体満足について深く考え、それが伝わってきました。

髙橋映美さん、まっすぐな人生を送ることへの決意が伝わってきました。

このように、いずれの作品も読書体験をもとにそれぞれに今後への決意、そしてエネルギーがひしひしと伝わってきました。今後も読書を通して考え心を磨き、未来を切り拓いていっていただきたくエールを送りたいと思います。

読書は、旅そのもの

全国高等学校長協会
大池　公紀

読書は、時空を超えた旅そのもの。時に沖縄の壕の暗闇、時にアウシュビッツの塀の中。時にノルウェイの哲学の教室、時に「はやぶさ」と共に宇宙の片隅に。さまざまな思いを馳せながら、今日も私たちは、旅人の如く本の世界を渡り歩く。

『戦後六十九年の夏に何を思うか』は、ルポルタージュの趣があったことが高く評価された。想っただけではなく、新聞部の取材として実際に足を運び、自分の目でその風景を確かめ、顔を見て話を聞く。そこには嘘がなく、だから人を説得する力があふれる。ネットの時代に地に足をつけた記述は、貴重だ。偶然長崎県大刀洗（たちあらい）平和記念館を訪問し、特攻隊員が蛍になって帰ってきたお話を語り部の方からお聞きした。その帰路の飛行機の中でこの作品を読むことになり、僕は鳥肌が立った。伝承ができる最後の世代である皆さんにこそ日本の哀しい歴史を世界の人たちに発信してほしい。皆さんにはその使命がある。

『言葉を砥ぐ』。「言葉は武器である」のリフレイン、そしてラストで「深い傷を癒す言葉」と反転する巧みな展開に読み手は惹きつけられる。かつて寺山修司さんの芝居を見た者として、この言葉のリフレインにはどこか懐かしさがあった。考え抜かれた精巧さを感じるのは僕一人ではないでしょう。「無分別に人を傷つけてまわるだけの言葉には意味がない」と覚醒した津田さんだからこそ、魂の宿った言葉の重さを大切にしてほしい。

『白を感じるとき』。私たちは、何の意識もなく白を瞥（みま）て、白を薄らと感じて、白を通り過ぎてゆく。そんな日常の中で「身動きが取れない緊張感」に気づく書き手の感性に脱帽だ。それは、時に弓道部の二本の矢に敷衍（ふえん）し、山頭火の歩みにまで広がっていく。書き手の感性が無二の白の存在を訴える。「白を感じたとき、私の感性は拡がり始めた」と吐く。さあ、岡田さん、その新しい世界へ旅に出よう。

『「雑音」がくれるもの』。高校生の時にしか描けない世界がある。そんな意味で、今回の作品群の中では個人的には僕のベストだった。制服の背中の「高校生」という文字も卒業とともにどこかに霧散してしまう。多くの人は、その雑音が聞こえたことすらも忘れ去ってしまう。今だけの、高校生限定の雑音を皆さんは聞くことが許されている。「たったそれだけのこと」の意味の大きさを知った髙橋さん、今を楽しめ、この時を享受せよ。

『私のオレンジ』。混沌、カオス、まとまりのつかない得体のしれない大きなクラウド。その中から自分の在り方をのたうち回って探し出すのは並大抵のことではない。不安も動揺も、そ

して歓喜もあるだろう。私が勤務している高等学校は、生徒の約三〇％が高橋さんと同じ喜びと苦悩を抱えている。だから一層この文章にのめり込んだ。悩め、若人よ、未来のために。同じ言葉を僕の生徒たちにもつぶやく。

『命を賭ける』。読書は、時に山を乗り越える勇気を与えてくれる。読書という体験を通して何かを感じ、何かに気づく。曽根くんの「命を賭けてでもする意味のある仕事がしたい」心の叫びが、強烈に聞こえてくる。強い文章だ。

『笑顔のすばらしさ』は、西村さんの素直さ、心優しさにあふれる作品だ。人の笑顔を生み出せることは、素敵なこと。西村さんには、今の姿勢をこの先も、ずっと大切にしてもらいたい。

『五体満足』では、障がいがあったとしても「健常者にはできない体験をすることができる」と永瀬さんは言う。ぜひ私たちに伝えてほしい、私たち健常者に足りないものを。永瀬さんには今後も発信してほしい。

＊第三十四回全国高校生読書体験記コンクール全入賞者一覧＊

【文部科学大臣奨励賞】　一編

長崎県	県立	長崎南高等学校	二年	小野　健	戦後六十九年の夏に何を思うか

【全国高等学校長協会賞】　二編

北海道	道立	札幌南高等学校	二年	津田智沙	言葉を砥ぐ
大分県	県立	大分豊府高等学校	二年	岡田悠花	白を感じるとき

【一ッ橋文芸教育振興会賞】　五編

宮城県	県立	仙台二華高等学校	二年	髙橋実央	「雑音」がくれるもの
三重県	私立	暁高等学校	二年	曽根綾太	命を賭ける
鳥取県	県立	境港総合技術高等学校	一年	西村香穂	笑顔のすばらしさ
島根県	県立	松江南高等学校	一年	永瀬紗織	五体満足
愛媛県	県立	松山南高等学校	二年	髙橋映美	私のオレンジ

【優　良　賞】　三九編

青森県	県立	青森北高等学校	一年	齊藤真子	中学生失格
岩手県	県立	盛岡第四高等学校	一年	菅原咲来	『月と蟹』を読んで
秋田県	私立	秋田和洋女子高等学校	三年	鈴木舞彩	たいせつなことは
山形県	県立	山形西高等学校	一年	延澤凪沙	「星やどり」の家族が教えてくれた成長
福島県	県立	会津高等学校	二年	二瓶理夏	「死」を受け止めて「生きる」
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	小田木優太	育てること、育てられること
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	一年	横野里佳	「はやぶさ」と私
群馬県	県立	高崎女子高等学校	二年	平井実也子	人がやらないことをやる
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	二年	髙橋優里佳	やさしさとは
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	笹原理夏	高三の夏と私と幸福論
東京都	私立	早稲田大学高等学院	三年	松山龍馬	生き抜く強さ

神奈川県	県立	平塚中等教育学校	五年	横溝ともえ	おんなじ
山梨県	県立	都留高等学校	一年	後藤琴音	行間を読む～『坊っちゃん』の清と私の祖母～
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	横坂光希	あなたの壁は何ですか
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	二年	矢田奈央	私を救ってくれたもの
富山県	県立	砺波高等学校	二年	赤尾英理子	切支丹が守ったこと
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	二年	山田聖実	家族愛の限界
福井県	県立	若狭高等学校	三年	抜井流光	現代社会と学問
岐阜県	県立	大垣南高等学校	三年	木村朱里	「命どう宝」なのだから
静岡県	県立	静岡西高等学校	二年	鈴木里佳	感謝『鏡の法則』
愛知県	県立	刈谷高等学校	一年	児玉　桃	真の幸福を求めて
滋賀県	県立	膳所高等学校	一年	藤倉真美	心を照らす出会いと言葉
京都府	私立	京都女子高等学校	一年	吹上若葉	人との出会い
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	松本昂一郎	カッコいい大人になる
兵庫県	県立	神戸高等学校	一年	矢部清隆	企業内研究職への誘い
奈良県	私立	天理高等学校	三年	佐古郁絵	犍陀多と私
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	細野愛理	私の半生、私の妄想
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	田谷美沙樹	老後を生きる
広島県	県立	安古市高等学校	一年	古谷美穂	決心
山口県	県立	下関西高等学校	一年	野崎こころ	私が生まれた日
徳島県	県立	徳島北高等学校	一年	礎　光希	傍観者からの第一歩
香川県	県立	高松高等学校	一年	藤井太雅	二度と踏めない青
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	横山加奈	たくさんの命に支えられて
福岡県	県立	小倉高等学校	一年	佐藤桃子	だから私は勉強する
佐賀県	県立	致遠館高等学校	二年	山口帆香	鏡の法則
熊本県	県立	熊本高等学校	二年	松本彩花	生きることの意味
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	三年	馬場春美	聴こえますか、こころの声
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	三年	田代旺子	考えることをあきらめない
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	城間　櫻	いのちは見えたよ

北海道	道立	旭川北高等学校	一年	髙橋和弥	同じ世界に生きる者として
北海道	道立	旭川東高等学校	二年	細野　瑛	私が山に登る理由
北海道	私立	札幌光星高等学校	二年	伊澤佑佳	受け継がれる平和
北海道	道立	札幌南高等学校	一年	山本彩華	命の約束
青森県	県立	青森北高等学校	二年	羽角麻那	きみの友だち
青森県	県立	八戸高等学校	二年	髙原真優	『永遠の0』を読んで
青森県	県立	八戸中央高等学校	三年	工藤ゆかり	人生最良の日、それは明日だ
青森県	県立	八戸中央高等学校	一年	長澤　結	旧友の励まし
岩手県	県立	花巻北高等学校	二年	浅沼春香	「逃げる」勇気
岩手県	県立	盛岡工業高等学校	三年	坂牛　円	向き合うことをモットーに
岩手県	県立	盛岡工業高等学校	三年	佐藤彩花	逃げ出すことの大切さ
岩手県	県立	盛岡第二高等学校	一年	青木美侑	私たちの今
宮城県	県立	宮城野高等学校	二年	川村千紗都	見えること、見せること
宮城県	県立	宮城野高等学校	二年	佐藤奏海	初めて泣いた本から
宮城県	県立	宮城野高等学校	二年	杉本花澄	道を歩む
宮城県	県立	宮城野高等学校	二年	孕石みく	「生きる」ということ
秋田県	県立	大館国際情報学院高等学校	二年	織田虎二郎	心をつかむ高校野球監督の名言
秋田県	私立	聖霊女子短期大学付属高等学校	三年	高橋晴子	乙女の密告、私の告白
秋田県	私立	聖霊女子短期大学付属高等学校	二年	跡部涼子	未知の世界への一歩
秋田県	県立	十和田高等学校	二年	千葉幹乃	自分だけの教科書
山形県	県立	上山明新館高等学校	一年	伊藤真由子	魔女の幸せ
山形県	県立	新庄北高等学校	二年	菅　詩織	人を思うこと
山形県	県立	新庄南高等学校	二年	高橋有海	失われた「美」を求めて
山形県	県立	天童高等学校	一年	押切瑠奈	音楽のすばらしさ
福島県	県立	安積黎明高等学校	二年	篠崎菜々子	千年前も現在も
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	柳沼彩瑛	心の中のモノクロとカラフル
福島県	県立	会津高等学校	二年	渋井愛子	「階段」をのぼった先にあるものは

福島県	私立	聖光学院高等学校	三年	今井麗菜	角度を変えて見てみたら
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	入江佳穂	時間の流れる国を生きる
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	横山達也	変身したのは誰か
茨城県	県立	水戸第一高等学校	一年	佐藤夢海	沈黙の先に
茨城県	私立	茗溪学園高等学校	一年	床井恵美	『たけくらべ』を読んだあとの心情の変化
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	三年	徳森美咲	『アヴェ・マリアのヴァイオリン』を読んで
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	三年	華野真紅	『穏やかな死に医療はいらない』を読んで
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	井上陸生	セルフヘイト
栃木県	県立	真岡女子高等学校	三年	福田理紗子	悪魔のいない未来へ
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	髙野真理也	太宰に学ぶ強さ
群馬県	県立	高崎女子高等学校	一年	堀田弥希	繋がれた世界
群馬県	県立	前橋女子高等学校	三年	宮﨑玲子	乗り越える壁、取り除く壁
群馬県	県立	前橋女子高等学校	二年	長谷川　麗	青春各駅停車
埼玉県	私立	星野高等学校	三年	吉田健一郎	愛と音楽という名のバトンを繋いで
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	福島未夏	自分
埼玉県	私立	星野高等学校	一年	齋藤佑香	もう一度生まれ変わりたい
埼玉県	私立	星野高等学校	一年	田中美実	生きる
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	竹田凪沙	母の本当の想い
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	浅野豪志	鬼灯
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	上尾佳世	人間の涙
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	一年	山本あゆみ	「皆と同じ」自分からの解放
東京都	私立	光塩女子学院高等科	三年	門田麻由子	未来へのバトン
東京都	私立	光塩女子学院高等科	三年	矢郷亜里香	亡き祖父の面影
東京都	私立	東京農業大学第一高等学校	二年	安永百恵	新しい世界を創るということ
東京都	私立	早稲田大学高等学院	三年	内田稔彦	人生の選択と切所
神奈川県	県立	光陵高等学校	三年	泉　柚子香	個人的イデアによる自我の追究
神奈川県	県立	平塚中等教育学校	四年	副島美桜	運命が語り継ぐ愛
神奈川県	私立	法政大学女子高等学校	三年	中村朱里	ことば
神奈川県	市立	横浜市立ろう特別支援学校	三年	本橋　慎	勇気の糧

山梨県	県立	上野原高等学校	二年	佐藤恵理菜	夢に向かって
山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	石原郁弥	数学の持つ魅力に触れて
山梨県	県立	白根高等学校	一年	佐野美雨	3・11忘れないあの日
山梨県	県立	都留高等学校	二年	白井実智瑠	死者の声を聴く
長野県	県立	大町高等学校	一年	仁科花穂	『お菓子でたどるフランス史』を読んで
長野県	県立	蓼科高等学校	二年	須田裕佳	一歩を踏み出して
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	滝沢雅織	大切なのは気持ち
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	原田彩加	カラフルな自分
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	二年	秋山祐衣	ゴドーを待ちながら
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	一年	吉田駿太	歯車のように噛み合う今を
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	磯部和奏	食を豊かにするために
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	村松健太郎	里山資本主義
富山県	県立	富山商業高等学校	二年	石仙奈津美	自分らしく生きる
富山県	県立	南砺福野高等学校	二年	藤井幹晴	僕を変える「魔法の言葉」
富山県	県立	南砺福光高等学校	二年	栗嶋彩名	「なぜ生きる」のか
富山県	県立	南砺福光高等学校	二年	松浦有里佳	死とどう向き合うか
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	一年	杉本奈柚	愛を知り学ぶ
石川県	県立	金沢錦丘高等学校	二年	八木咲弥佳	私のいのちの使い方
石川県	県立	金沢二水高等学校	一年	児玉実穂	「日常」を「特別」に変えるには
石川県	県立	七尾高等学校	三年	長谷川詩歩	今しかない「今」を求めて
福井県	県立	高志高等学校	一年	石上穂伸子	幸せって何だろう～『アフガニスタンに住む彼女からあなたへ』を読んで～
福井県	県立	福井商業高等学校	三年	嶋﨑千晴	前を向いて
福井県	県立	藤島高等学校	一年	小髙桃子	すべての想いを歌にこめて～『ひとつのいのち、ささえることば』を読んで～
福井県	県立	若狭東高等学校	三年	松井　翔	夢を現実に
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	宇治野舞花	勝ちに行きます
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	近藤康平	目指す医師像は
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	二年	大嶋一輝	僕達に「帰る場所」はあるのか
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	二年	髙田のどか	「生きる」とは
静岡県	県立	掛川西高等学校	一年	増田愛子	私とAと白ゆき姫

静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	三年	松本継海	坂口安吾の信念
静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	一年	池谷貴子	現実と美と
静岡県	市立	浜松市立高等学校	三年	土屋夏琳	日本語とは
愛知県	私立	愛知淑徳高等学校	一年	伊藤光来	一歩一歩、歩くこと
愛知県	県立	一宮西高等学校	一年	小笠原里奈	走り続ける、強く
愛知県	私立	椙山女学園高等学校	二年	干物友梨香	初めましてドビュッシー
愛知県	県立	豊田西高等学校	二年	元川稜也	本当の世界を見つめる
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	片浦　望	つながり
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	二年	東　楓	信じること
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	内田陽菜	生きることを知るために
三重県	県立	名張西高等学校	一年	井上知夏	もしおばあちゃんだったら……
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	澤原綾乃	『ハッピーバースデー』を読んでの決意
滋賀県	県立	高島高等学校	一年	福田翔輝	あきらめなければ夢は叶う
滋賀県	県立	東大津高等学校	一年	角田菜々花	遠くて美しい、まだ見ぬ高みへ
滋賀県	県立	水口東高等学校	一年	藤田芹袈	生きるということ
京都府	府立	桂高等学校	三年	松下実代	福島からのおくりもの
京都府	府立	桂高等学校	二年	杉内　稜	鍛えるのではなく整える
京都府	府立	嵯峨野高等学校	二年	中西樹里	寄り添う
京都府	私立	立命館高等学校	三年	大野玉花	それぞれの生き方。
大阪府	市立	大阪市立汎愛高等学校	二年	福山そら	マララと共に平和な未来を
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	三年	西垣光希	「なあなあ」の精神
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	一年	大﨑　舞	泥棒に学んだこと
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	桂　瑞穂	確乎
兵庫県	県立	出石高等学校	三年	村上菜津美	料理という一大事
兵庫県	県立	柏原高等学校	二年	芦田侑里子	『星のかけら』を読んで
兵庫県	県立	加古川東高等学校	一年	池畑　廉	自分の意思を持って
兵庫県	県立	兵庫高等学校	二年	市川鈴子	ロシアからの指針
奈良県	県立	畝傍高等学校	二年	羽藤江里	『夜のピクニック』を読んで
奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	堀川陽生	本当の幸せ

奈良県	県立	高田高等学校	一年	井上佳奈	夢はかなうんだよ
奈良県	県立	高田高等学校	一年	山﨑実莉	私を変えてくれた本
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	髙尾果林	生と向き合うこと
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	髙垣侑里	国籍を超えて
和歌山県	県立	橋本高等学校	二年	塙平真由	わたしとマララ
和歌山県	県立	橋本高等学校	二年	道上真衣	信じる道
鳥取県	私立	翔英学園米子北高等学校	二年	濱﨑朱那	成長過程
鳥取県	県立	鳥取湖陵高等学校	二年	古田杏実	一歩踏み出す勇気
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	一年	牧浦遼太	家族とは何なのか
鳥取県	私立	湯梨浜高等学校	一年	石津裕梨	私と「私」の銀の匙
島根県	県立	出雲高等学校	三年	鐘築春香	心のあり方
島根県	県立	大田高等学校	一年	小谷志保子	今、私に繋がる思い
島根県	県立	松江北高等学校	二年	今村希莉	『こんな夜更けにバナナかよ』を読んで
島根県	県立	松江北高等学校	二年	三浦　学	孤独を抱えて
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	二年	信岡　希	私流エンジェル・リポート
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	一年	小林美雪	私だけの十六歳
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	佐藤　桃	レインツリーの国の実現
岡山県	県立	玉野光南高等学校	二年	保田俊輔	これからの自分
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	二年	松本莉奈	世界の狭さから抜け出すために
広島県	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	大西風生花	カラフルに生きよう
広島県	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	西本梨奈	究極の努力をする決意をした日
広島県	国立	広島大学附属高等学校	一年	松林可那子	私が今、親に伝えたいこと
山口県	県立	岩国工業高等学校	二年	重里菜月美	進む
山口県	県立	下関西高等学校	一年	田川鈴華	許すということ
山口県	県立	徳山高等学校	二年	森元莉子	希望の光
山口県	県立	豊北高等学校	二年	熊井梨衣	生きることのありがたみ
徳島県	県立	城東高等学校	一年	石川明日香	自分とのつながり
徳島県	県立	徳島北高等学校	二年	中村真奈美	自らの世界に閉じこもるということ
徳島県	私立	徳島文理高等学校	一年	松島そよ佳	『博士の愛した数式』を読んで

徳島県	県立	富岡西高等学校	一年	大谷菜々	答えと追求
香川県	県立	高松高等学校	二年	大道鏡花	忌の先に見たもの～『城の崎にて』を読んで～
香川県	県立	丸亀高等学校	二年	真鍋実佳	諦めることの意味
香川県	県立	丸亀高等学校	一年	田中こころ	向かい風に
香川県	県立	丸亀高等学校	一年	福家安祐美	悲劇をくり返さないために
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	二年	栗山一輝	『フェルマーの最終定理』―結果を得るための自信
愛媛県	県立	新居浜西高等学校	二年	近藤　栞	『植物図鑑』を読んで
愛媛県	県立	松山中央高等学校	一年	菅家彩菜	今、持てる小さな勇気
愛媛県	県立	松山南高等学校	一年	杉野航洋	穴
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	秋山優樹	走り続ける
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	西内　悠	未来への飛翔
高知県	県立	高知農業高等学校	二年	松田美沙	みんなを元気にする給食
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	吉本正恵	罪が罰より重い訳
福岡県	県立	小倉高等学校	一年	今田　南	「理想の自分」になるために
福岡県	県立	修猷館高等学校	二年	中山遥子	母親の魔法
福岡県	県立	明善高等学校	二年	山下千佳	風に向かって
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	二年	今宮千里	生きていく上で大切なこと
佐賀県	県立	唐津東高等学校	二年	岩本真実	人間らしく生きる
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	佐々木美歩	カラフルな未来を
佐賀県	私立	佐賀学園高等学校	一年	権藤真未	「私」をつくるもの
佐賀県	県立	佐賀県立ろう学校 高等部	一年	森　翔太	I have a dream.
長崎県	県立	壱岐高等学校	二年	坂口茉亜紗	ひとりになって気付くこと
長崎県	県立	諫早商業高等学校	三年	松﨑麻美	枯れるように死にたい
長崎県	私立	純心女子高等学校	一年	松田彩里	私が出逢った本
長崎県	県立	長崎東高等学校	一年	中山直樹	「なあなあ」と生きている自然
熊本県	県立	天草高等学校	二年	金田　楓	「家族」と向き合う
熊本県	私立	九州学院高等学校	一年	村井香音	頂点は
熊本県	私立	熊本学園大学付属高等学校	一年	柊中実命	音楽・つながる未知の心
熊本県	私立	熊本信愛女学院高等学校	二年	村上日彩	生きる、命さえあれば前進できる

大分県	県立	大分上野丘高等学校	三年	田中雛子	「豊か」ということ
大分県	県立	大分上野丘高等学校	二年	金子愛美	命の花
大分県	県立	大分鶴崎高等学校	二年	白井実希	甦った私の感性
大分県	私立	昭和学園高等学校	三年	馬場柚希	トメさんに学ぶ夢レシピ
宮崎県	県立	延岡高等学校	一年	栗栖俊汰	僕が平和について考えた日
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	二年	丸山和宏	命を変えた本
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	三年	満行雄生	私の心を強くした本
宮崎県	県立	宮崎西高等学校	二年	齋藤丈夢	夢への一歩
鹿児島県	県立	大島北高等学校	三年	伊集院夢香	『のぼうの城』を読み、自分の糧に
鹿児島県	県立	加治木高等学校	二年	池田しおり	宮沢賢治の世界
鹿児島県	私立	志學館学園志學館 高等部	二年	増田愛子	幕が上がる
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	二年	関屋みずき	そのドアを開けて
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	又吉佑美	豊かさのなかで見失ったものは
沖縄県	県立	開邦高等学校	二年	松原哲平	「なんくるないさあ」と共に
沖縄県	県立	首里高等学校	三年	伊良波賢弥	琉球の食文化再興を夢見て
沖縄県	県立	那覇国際高等学校	三年	喜屋武清風	比較の仕方

（敬称略）

上位中央入賞者八名の読書体験記、及び優良賞・入選作のお名前、高等学校名は、左記の『一ツ橋文芸教育振興会の読書推進活動』ホームページに紹介されます（2月上旬予定）。
http://www.hitotsubashi-bks.jp/dokusho/

表紙デザイン・中島慶章